

東京都ボランティア活動推進協議会 気運醸成分科会（第2回）議事録

平成28年12月20日

東京都庁第二本庁舎31階特別会議室22

【山本都民生活部長】 それでは、全員おそろいですので、お待たせいたしました。ただいまから、第2回東京都ボランティア活動推進協議会気運醸成分科会を開催させていただきます。本日はお忙しいところ、朝からお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。私は当分科会の事務局を務めさせていただいております生活文化局都民生活部長の山本でございます。どうぞよろしく願いいたします。

進行は地域活動推進課長の猪俣がさせていただきますので、よろしく願いいたします。

【猪俣地域活動推進課長】 進行役をいたします、東京都生活文化局地域活動推進課長の猪俣と申します。どうぞよろしく願いいたします。失礼ですが、座らせていただきます。

まず議事に入ります前に配付資料のご確認をお願いいたします。順番に紹介してまいります。まず次第がございます。その後、配布資料一覧、次第以下、記載させていただいております。それから、座席表、出席者の方の名簿、資料1が行動等実態調査、資料2がPR事業の実施報告、資料3が前回の分科会の主な意見等、資料4が意見交換のための論点メモ、資料5が前回の分科会の議事録となっております。ご確認をよろしく願いいたします。特に不備等ございませんでしょうか。もし不備がございましたらお手を挙げていただければ担当のほうがお持ちいたしますので、よろしく願いいたします。

なお、配付いたしました資料のうち配布資料一覧にも書かせていただいているのですが、資料1のボランティア実態調査につきましては、まだ速報の段階で正確に固めているということではありませんので、今日は題材としてお示しさせていただきました。そういった関係から、会議終了後、回収をさせていただきます。この点、よろしく願いいたします。また、今日、こちらにお越しになられているプレスの方々や傍聴の方々に関しましてはこの資料につきまして、委員の方限りということで扱わせていただきます。取扱注意ですので、どうぞよろしく願いいたします。

続きまして、本日の皆様方の出席の確認をさせていただきます。4枚目になりますが、お手元の名簿をごらんいただきたいと思うのですけれども、欠席された方につきましては公益社団法人経済同友会さん、それから国立大学法人の東京外国語大学さん、ご欠席です。

そのほかの皆様におかれましてはご出席となっております。

なお、前回ご出席いただいた方から公益社団法人企業メセナ協議会の澤田様と東京都町会連合会の鎌水様と認定NPO法人の難民支援協会の石井様と一般社団法人日本経済団体連合会の萬屋様は今回、初めてご出席されました。ご挨拶等はいただきませんので、ご了承いただきたいと思います。

議題に入ります前に、今回初めてご出席いただきました団体として調布市の社会福祉法人調布市社会協議会の高木様に来ていただいておりますので、一言ご挨拶をお願いいたします。

**【高木委員】** 済みません。貴重な時間ありがとうございます。調布市社会福祉協議会市民活動支援センターの高木でございます。前回、業務の都合で欠席をさせていただきました。大変失礼いたしました。地域の中での市民活動の視点から何か意見できることとかあれば協力をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくをお願いいたします。

**【猪俣地域活動推進課長】** ありがとうございます。

続きまして、東京都の職員を紹介させていただきます。まず、東京都生活文化局次長の桃原でございます。

**【桃原生活文化局次長】** 桃原でございます。よろしくお願いいたします。

**【猪俣地域活動推進課長】** 続きまして、都民生活部管理法人課長の松下でございます。

**【松下管理法人課長】** 松下でございます。よろしくお願いいたします。

**【猪俣地域活動推進課長】** 続きまして、同じく都民生活部多文化共生推進担当課長の山崎でございます。

**【山崎多文化共生推進担当課長】** 山崎でございます。よろしくお願いいたします。

**【猪俣地域活動推進課長】** 同じく都民生活部地域活動推進課統括課長代理の小野でございます。

**【小野統括課長代理】** 小野と申します。よろしくお願いいたします。

**【猪俣地域活動推進課長】** 今回、オブザーバーといたしまして、庁内からオリンピック・パラリンピック準備局の運営担当課長の下出が出席させていただいております。

**【下出事業推進担当課長】** 下出でございます。よろしくお願いいたします。

**【猪俣地域活動推進課長】** 以上で委員の皆様からのご挨拶及び出席者のご紹介を終わらせていただきます。

なお、本分科会は、東京都ボランティア活動推進協議会運営細則第4条及び第1条によ

りまして公開とさせていただきます。特にご異論がなければ、本分科会の会議録につきましても公表とさせていただきますことをご了承願います。

それでは、今後の会の進行につきましては分科会長にお願いしたいと存じます。山崎分科会長、どうぞよろしくお願ひいたします。

【山崎分科会長】 ご紹介にあずかりました山崎でございます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

今回は、新しく委員の方で交代された方が4人と、新しく加わった方お一人がごいますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。何かわからなかったら、手を挙げてください。ありがとうございます。

それでは、皆様のお手元にごいますけれども、次第に従いまして議事を進めてまいりますが、事務局から報告事項がございますか。

【小野統括課長代理】 それでは、報告事項につきましては、私、小野から説明をさせていただきます。お手元の資料でいきますと、資料1と2につきまして、説明させていただきます。

資料1のほうはボランティア行動等実態調査（速報）でございます。この調査ですけれども、調査実施の概要の1の調査目的のところをごらんいただければと思います。東京都がボランティア活動を推進する中で、都民のボランティア活動に関する取り組み状況等についての把握を行うための調査ということでございます。

調査項目なんです、2にありますとおり、ボランティア活動に関する関心の有無であるとか、活動の経験の有無、情報の入手先等でございます。こちらに挙げられている9つの項目につきましては2ページ目以降に結果をお示ししておりますので、この後説明させていただきます。

調査設計ですけれども、調査対象は都内に住む10歳以上の男女、個人、それから標本数は5,000となっております。調査方法は個別訪問面接聴取法で実施いたしまして、調査期間は平成28年10月1日から31日までとなっております。

4の回収の結果でございますが、6割の3,027標本となっております。

それでは、調査結果について説明をさせていただきます。

まず2ページ目ですが、ボランティア活動に対する関心の有無ということで、表で行きますと右から3番目の列の一番下の行をごらんいただきますと、こちらは割合が出ておまして、49.9%ということで、約半数の方が関心があるという回答をしていただいております。

ります。

続きまして、3ページでございますが、ボランティア活動の経験の有無を問うものでございます。表で行きますと、左から3列目に直近1年間にボランティア活動に参加した人の割合が出てきておりますが、22.9%ということで、同じ割合でいきますと、総務省の5年前の調査では24.6%という数字が出ておりますので、5年前と比べると少なくなっているという状況になってございます。なお、直近1年間はないけれども、過去に参加したことがあると回答した人の割合が右から3番目の列で18.3%とありますので、ともかくも過去にボランティア活動に参加したことがある人の割合というのは4割ということになります。

続きまして、1枚おめくりいただきまして、4ページになります。図はボランティア活動への参加状況ということでまとめております。上位2つが子供を対象とした活動、まちづくりのための活動との回答が多く挙がっているという状況でございます。

続きまして、5ページ目でございますが、ボランティアへの参加状況を性別、年代別に比較したものになります。図か2つございますが、それぞれの図の一番左の棒がそれぞれの性の合計となっております。男性が女性よりも数値が低いということがおわかりいただけるかと思えます。また、年代別に見てまいりますと、男性の20代、30代、女性の20代が低いということもご確認いただけるかと思えます。

続きまして、6ページになります。こちらはボランティア活動の経験があるという方に対しまして、ボランティア活動の情報の入手先を尋ねた問いでございます。学校、職場、団体が紹介しているものを見てとか、人から直接聞いてとか、人づてのものが高い割合を示しております。下から5つ目のインターネットや電子メール、下から2つ目のSNSは割合低いという数字が出ております。

それから続いて7ページ目になります。活動に参加したことがあるという方に対しまして、ボランティア活動に参加したきっかけを聞いているものでございます。こちらも学校での授業や活動、行事を通じて、家族等の話を聞いて、自治会や子供会などの活動を通じてなどの人づてのものが多く回答されております。また、この問いかけにおきましてもインターネットやSNSなどの回答が少なくなっているというところが特徴かなと思えます。

それから、次のページになりまして、過去に参加したことがあると答えていただいた方に対しまして、ボランティア活動に参加した理由というものを聞いているものになります。こちらにつきましては、何か社会の役に立ちたかったからとか、興味を持ったからという

回答が多くなってございます。

そして、次の9ページですけれども、ボランティア活動を一切していないと回答した人に対しまして、その理由を問う設問でございます。こちらをごらんいただきますと、時間の余裕がないと回答された方が約6割と圧倒的に多くなってございます。

続きまして、10ページでございます。こちらは、これは全員にお聞きしているんですが、今後参加を希望するボランティア活動の内容について尋ねた問いとなっております。一番上に参加したいボランティア活動がないという回答が来ておりますが、これは裏を返すと、75%の方が何らかのボランティアに参加したいと捉えることができるかなと考えておりますが、そんな中でも子供を対象とした活動であるとか、東京大会関連のボランティア、まちづくりのための活動などが上位に挙がっております。

それから、11ページに目を向けていただきますと、先ほど紹介した、今後参加を希望するボランティア活動のうち、東京大会、オリンピック関連のボランティアを希望する人がほかにどんなボランティア活動を希望しているか、クロス集計したものになります。スポーツ、文化、芸術などに関係した活動や子供を対象とした活動、まちづくりのための活動が上位となっております。

続きまして、12ページになりますが、こちらは全員に対しまして、行政機関に望むことを聞いた設問となります。特に望むことはないという回答が一番多くなっておりますが、内容があるものの中では情報提供であるとか、普及活動、体験する機会の提供といった項目が上位に挙げられております。

そして、最後13ページになりますが、東京ボランティア・市民活動センターに関する設問となります。表が3つございますが、一番上は全員に対して東京ボランティア・市民活動センターについて知っているかを尋ねるもの。それから2番目は、やはり全員に対してですけれども、東京ボランティア・市民活動センターのウェブサイト「ボラ市民ウェブ」を知っているかどうかを聞いたものとなります。いずれの表も右から2番目の列で知っている人の割合を示しておりますけれども、ボランティア・市民活動センターについては約6%、ボラ市民ウェブについては約3%という結果になってございます。しかしながら、3つ目の表なんですけど、東京ボランティア・市民活動センターないしボラ市民ウェブにつきまして利用したことがあると答えた方に対しまして、その満足度を問う設問となっております。右から3番目の列にありますとおり、7割の人が満足していると回答していただいております。

早足ですが、ボランティア行動等実態調査の結果（速報）については以上となります。

続けて資料2についても説明をさせていただきます。カラー刷りの資料となります。こちらにつきましても、前回の第1回の分科会におきましても簡単にご紹介させていただいておりますが、1の実施目的にもありますとおり、誰でも気軽に参加でき、喜びや人とのつながりを得られるボランティア活動をテーマといたしまして、20歳前後の学生を中心として対象としたイベントを実施するものになります。イベントとあわせて、広報も展開しているというところでございます。

このイベントのタイトルなんですけれども、「代々木公園で#ちよいボラwithみちよぼ」というものでございまして、みちよぼというのは出演いただいたタレントさんの愛称でございます。2にありますとおり、開催は11月23日、代々木公園野外ステージにて実施しております。モデルのみちよぼさんやお笑い芸人の地球というコンビに出演いただきまして、前半はごみ拾い体験、後半はボランティアに関するトークショーという内容でございます。

そのイベントの実施結果でございますが、参加人数は261名。その内容といたしましては、裏面をごらんいただきたいんですが、狙いどおり、20歳前後の世代が3分の1を占めるという結果となっております。

イベントを知ったきっかけとしましては、出演タレントの方のSNSとか、渋谷、原宿で展開いたしました告知ポスターを答えている方の割合が高くなってございます。

満足度につきましては、満足した、それから、まあまあ満足したと回答した方の割合が77%となっております、不満だったと答える方はいらっしゃいませんでした。

そして、最後のカの部分でございますが、こちらは今後ボランティアをやってみたいかという問いにつきましては、思ったと答えた方が95%を占めているという結果になりました。

それから、次のページでございますが、イベントとあわせて展開いたしました広報の媒体とその期間の一覧となっております。イベントに合わせて11月に第1回の広報を実施しておりますが、イベント時に撮影した映像をもとに、また1月中旬から下旬に再度広報を行う予定となっております。

それから、その裏面のページでございますが、今回、11月23日のイベントにご協力いただきました団体の一覧となっております。参考までごらんいただければと思います。

私からの説明は以上となります。よろしく願いいたします。

【山崎分科会長】 ありがとうございます。ただいまの調査の速報でございますね。まだこれから細かい調査の結果が出てくるということでございましょうか。何かご質問等ございましょうか。ただいまの説明につきまして。どうぞ。

【石井委員】 ありがとうございます。難民支援協会、石井と申します。1点だけ質問なんです、資料1のほうの5ページのところにあります年代別というところで、10代というところが男女ともに一番多いとなっていながら、これって学校、つまり、ほんとうに自発的なボランティアというところに限定されているのか、学校行事のような形でのボランティアも入っているのか。20代がとても低いところで見ると、いわゆる大学生という世代よりも、もっと小さな人という、そのあたりはいずれ分析として出てくるんでしょうか。

【小野統括課長代理】 今、クロス集計等いろいろ図っているところでして、できる限り細かく情報を分析して、また改めてお伝えしたいなと思ってございます。最初のほんとうに意思に基づいてやっているかどうか、学校行事としてやっているかどうかという点につきましては、設問の構成がもしかしたらそこまで対応できるような形にはなっていないので、正確な数字は出せないかもしれませんが、我々も気にしておりますので、そういったところでもできる限り出せるように分析してまいりたいと思います。

【石井委員】 ありがとうございます。

【鶴賀委員】 カタリバの鶴賀と申します。調査の設計についてお伺いさせてください。5,000の標本をとられたと思うんですけども、満10歳以上の男女の方々を不作為にというか、抽出して、5,000とられた。そのとき年齢とかは平均的にとられたということなんですか。5ページ目に参加者の年齢が分かれているんですけど、そもそもどれくらいの割合だったのかというところで、この割合が出たのか、ちょっと気になりまして。ふと思ったのが、面接でできる人は40代ぐらいの昼間の方なのかなと思うと、どうしても40代が多くなるんじゃないかなと思ったりしたので、その辺、詳しく教えてください。

【小野統括課長代理】 まず5,000標本という数ですけども、もともと総務省で実施している社会生活基本調査というものをベースにして5,000という数字を出しております。調査設計のところの最初に、3番の調査設計、(3)標本抽出方法とありまして、住民基本台帳に基づく層化二段の作為抽出法という方法をとっているんですけども、一応東京都を7つのエリアに分けて、そこから人口比と、それから極力年代別に分けて、対象を選んだというところで、一応、年代はバランスよく、東京都全体の人口比に

合うような形で選定しているというところがございます。

【鶴賀委員】 わかりました。ありがとうございます。

【山崎分科会長】 ただ、面接時間のことをちょっとおっしゃったんですね。おいでになる、昼はいないかもしれないという。

【鶴賀委員】 そうですね。

【小野統括課長代理】 そのあたりは実際調査する過程で、平日はいないのでというご連絡をいただいたところにつきましては、アポをとって休日に行っていたとか、そういう調整は調査員のほうでさせていただいております。

【山崎分科会長】 では、よろしゅうございますか。次に行かせていただきたいと思えます。これはまだ途中なので、後で回収ということでございましたね。

それでは、続きまして、議題1のボランティア活動気運醸成の裾野の拡大につきましてどのように取り組んでいくのか、事務局から説明をいただきたいと思うんですが、これが今日のメインになると思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

【猪俣地域活動推進課長】 今、分科会長からお話いただいた議題1番のボランティア活動の気運醸成裾野拡大に向けた取り組みについてご説明させていただきます。まず私のほうから説明させていただきますのは資料3と資料4なんですけれども、前回の分科会において皆様方のほうで構成団体となっていた団体の方々が主体的にどのように取り組んでいっていただけるかという観点でご意見を伺おうと思っていました。しかし、思いのほか時間がなくなり、貴重なご意見という形になってしまっているのですけれども、そのいただいた意見を資料3で簡単な項目ごとにまとめさせていただきまして、資料4で、そのご意見を踏まえて、本日、気運醸成関連とメニュー事例収集という2つの項目及びその他ということで、10項目、論点のメモとして意見交換していただきたいという形でまとめさせていただいております。

まず資料3の前回の分科会における主な意見等を簡単にご説明します。既に資料をお送りした点から項目ごとに整理しておりますので、改めて確認の意味を込めまして、読ませさせていただきます。まず構成団体としての取り組みについてのご意見といたしましては、1つ目、中間支援組織である団体さんからですけれども、中間支援組織であるので、分科会での取り組み等、会員にフィードバックしながらともにボランティアの気運を高めていきたい。それから、マッチング・コーディネートの2つ目のところにも再掲させていただいているんですけれども、マッチングには非常に課題がある。企業のプロボノで何か活動し



たいと思っても、うまくマッチングできる仕組みがなく、自分たちの知っている範囲にとどまってしまう。その意味で、東京ボランティア・市民活動センターが行っている相談の20%が企業ということについて広く紹介したい。3つ目、月に1回ニュースを出している団体さん、このことで、気運醸成に関するイベント等を紹介していくということが可能であるというご意見がございました。

2つ目としてマッチングのコーディネートに関して、多くの意見を出していただきました。まず1つ目、企業から社員のボランティアについて多く問い合わせ等受けるようになったが、受け入れ側として、日常業務に追われていて、なかなか企業側の要望に応えられない。人数指定のあるものや短期のボランティアをつくっていくのは難しい。受け入れ能力をいかに高めていくかが課題。2つ目です。マッチングには非常に課題がある。これは先ほどお話しましたが、再掲になっていますが、読ませていただきます。企業のプロボノで何か活動したいと思っても、うまくマッチングできる仕組みがなく、自分たちの知っている範囲にとどまってしまう。3つ目、さまざまな企業の活動をしたいという人たちを受けとめる受け皿が十分でない。受け手側がそのためのプログラムをつくるために大きなエネルギーが要るが、対応できていない。そこを解決していくことが気運を高めていくためには必要。仕組みづくりを協議したい。4つ目、ボランティアを送り出す側でもコーディネートしてもらうことが重要。5つ目、企業にとってはどこにどのような人材を送り出したらいいかが難しいということで、受け入れる側のプログラムを組むことの課題ということで、その受け入れられるだけの形をいかにしてコーディネートして、コーディネーターの方などがプログラムをつくっていくか。あるいは逆に、送る側のほうでもプログラムをつくって送り出すという、そのあたりの課題が非常に浮き彫りになっているということが言えると思います。

それから3つ目、学生等のくくりですけれども、1つ目、学生をどう巻き込んでいくかが重要。単位化により授業の中に組み込んでいくなど、活動の機会を提供していくことを考えていく必要がある。2つ目、今いる学生は2020年には学生ではない。ボランティア活動の経験や知識を身につけたOB、OGをどう活用していくかが大切であるということで、単位化などの話とOB、OGになった後も引き続きそうした方にご活躍いただくためにどうしたらいいかというご意見でした。

最後、その他のカテゴリーですけれども、こちら1つ目、地域から大きな企業とつながりを持つ機会はないので、東京ボランティア・市民活動センターを通して企業とのつながり

りを持っている。ボランティアとしては語学や通訳に関する活動で中心となっているが、得意なところを伸ばしていくことで結果的に各団体の連携が進み、気運醸成に貢献しているのではないかというご意見をいただいております。

こうしたご意見を踏まえまして、資料4をごらんいただきたいのですが、本日の意見交換のための論点メモということでまとめさせていただき、これを題材にしてご意見をいただければというふうに思っております。

なお、気運醸成関連、メニュー・事例収集、その他に分けられておりますが、左側に二重丸がついているものと一重丸がついているものがございまして、お時間の都合もありますので、山崎分科会長のご進行にお任せさせていただくのですが、基本的に二重丸を中心にご意見をいただければというふうに事務局のほうで考えております。

まず気運醸成関連ですが、ボランティア活動の気運を盛り上げていくためには、より多くの企業や団体のご理解、ご協力を得ることが必要。協力をいただける企業、団体を広く募っていったらどうか。また、そのためにはどのようにしていったらよいか。

2つ目、前回、幾つかご意見、会員への分科会の取り組みや東京ボランティア・市民活動センターの事業の紹介のほか、ニュースレターを使ったイベント紹介等が出されていますが、その普及啓発など、各団体独自で取り組めるものとしてどのようなものが考えられるか。

3つ目、東京2020大会の開催を控え、大会関連のボランティア活動に関心を寄せる方が増えると想定される。こうした方々に大会関連以外のボランティア活動に関心を持ってもらうためにはどのような取り組みが効果的か。先ほどの調査でも2020大会のボランティアを希望する方が、そのほかに対しても希望というか、活動したいと思っている方もいらっしゃいますので、そういうことについてより関心を持ってもらうためには、どのような取り組みが効果的かとなっております。

4つ目、東京には企業のほか大学等の教育機関も多く集積しています。前回の分科会でも学生を巻き込むことが重要だとの意見が出されておりますが、学生の参加を増やすためにはどのようにしたらよいか。以上の4点を重要な事項として掲げまして、最後に1つの丸ですけれども、ボランティア活動の気運を盛り上げていくために東京で活動している企業同士やNPOとの交流が重要ではないか。企業やNPOが交流していくためにはどうしたらよいかというのを挙げさせていただいております。

次に、メニュー・事例収集ですが、二重丸が2つございまして、まず1つ目、多くの人

がボランティア活動に関心を持てるようにするため、さまざまな分野の活動事例を紹介するウェブサイトの構築を現在検討していこうとしております。どのような事例を収集したら効果的か。また、そうした情報をどのように収集したらよいか。

2つ目、時間がなくてボランティア活動に参加できないという人が多いことから、ちょいボラ、先ほどPR事業でちょいボラという表現を使っていますが、東京都としましてなるべく1つの表現を推すことによって効果が発揮できるという観点で、通常一般的にはちょこボラとか、ちょこっとボランティアという表現を使いますが、あえてちょいボラという言葉を使っていますけれども、ちょいボラ、身近で気軽に活動できるボランティアの普及が必要。ちょいボラのメニューとしてどのような活動が考えられるか。また、そうした事例をどのように収集したらよいか。さらにちょいボラを普及させる方法として効果的なものは何か。

最後に1つの丸として、東京に集積する企業の取り組みを後押しするためにプロボノのような企業の社員等が行うボランティア活動の紹介が必要ではないか。事例を集めるためにはどのような取り組みが必要かとなっております。

また、最後にはその他2つとして、前回、マッチングやコーディネートが重要である旨の意見が複数出されておりますが、効果的にマッチングやコーディネートが行われるようにするためにはどのような取り組みが考えられるか。最後、皆様にご協力いただいた社会貢献大賞については来年度以降も継続を予定しております。より多くの方に注目されるなど表彰の効果を高めていくためにはどのような改善が必要かということで、以上10点、論点メモとして掲げさせていただいております。

それぞれ時間がございますので、その中で、ぜひご意見を頂戴して、方向性とか、どういう形で取り組んでいくかというのをぜひまとめさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。事務局からの説明は以上でございます。

**【山崎分科会長】** 前回の議事録は一番後ろについている資料ですね。

**【猪俣地域活動推進課長】** そうです。今回、この議事録から資料3の意見をピックアップさせていただきましたので、資料5につきましては省略させていただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

**【山崎分科会長】** わかりました。それはちょっと長いので、36ページぐらいありますから、これは後で見させていただくとして、今のように論点を整理させていただいております。資料3、資料4ですが、気運の醸成に関連する部分とメニューや事例収集の方法というふ

うに2つに分けてありますが、今、猪俣課長がおっしゃいましたように、二重丸のところを中心に議論を進めてはどうか。時間があれば、一重丸のところをということで、まず気運醸成に関しましてでございますが、今ここに整理されておりますが、二重丸が4点ですが、まず気運醸成に関しましてからでも構いませんけれども。皆様、読んでいらっしゃる、目を落としていらっしゃいますけれども、どうぞご自由にご発言ください。

【猪俣地域活動推進課長】 補足させていただきます。例えば気運醸成関連の、順番でいきますと、一番上は、今、こちらの気運醸成分科会が東京都ボランティア活動推進協議会という、賛同いただいた団体、今日お越しの団体のほとんどはお入りいただいているわけなんですけれども、その団体が東京都を含めて、66団体がございまして、気運醸成というのがどういう位置づけなのかというのはありますが、社会全体でボランティア活動を推進していくためには盛り上げていこうという、そういう協議会で、その団体が、それぞれのお立場の中で、いろいろできることに取り組んでいっていただきたいという、そういう趣旨なんですけれども、多くの団体に参加していただいたほうが気運は高まるであろうというところなんですけれども、ただ、今、協議会のコア団体として66ございまして、協議会の団体として増やしていくというところの難しさなどもあり、サポーターといえますか、そういうのに賛同していただける団体の入っていただき方というか、そのあたりをどうしていったらいいかなど、いろいろ企業さんなり、まとめていらっしゃる団体やいろいろな団体が今日お越しでいらっしゃるの、そういう観点でご意見をいただければというふうに思っています。1つ目についてはそういう趣旨で、ご意見をいただいた中で、ご意見を踏まえて、そういう形でまとめさせていただいたという形でございます。

【山崎分科会長】 ご承知のようにこの推進協議会には66団体が参加しておられますが、しかも、その中では例えば経団連様のように、いろいろな企業をまとめていらっしゃるし、町会、自治会にも入っていただいているし、あるいは社会福祉協議会、あるいはボランティア、市民活動を担当していらっしゃる皆様、参加していらっしゃるんですが、それぞれがどうやってご協力をいただける企業や団体を広く募っていくため、広く裾野をつくっていくためにはどうしたらいいだろうかということをお話しいただければということなんです。

2番目は普及啓発。各団体が独自でいろいろ取り組んでいらっしゃると思うんですが、

普及啓発の方法についてどうしたらいいだろうかということなんですね。

3つ目が2020大会関連以外の活動、それが一番中心かもしれませんが、それに加えてボランティア活動に関心を持ってもらうにはどうしたらいいだろうか。

最後は、東京には企業とか、大学など、大きなそういう組織が集中している場所なので、特に大学生、若者が参加するのには関心を持ってもらうのにはどうしたらいいだろうかという感じで4つということなんです。

**【澤田委員】** 済みません。初めて参加するので、大変僭越なのですが、ピントが外れていたら申しわけありません。1番目の広げていくため企業や、団体というところを見ると、私の感触ですと、今企業もいろいろな団体さんもボランティアをする気持ちは十分あると思うんですね。回って行って説明するときに、参加してくださいといっても、一体何をするのかというのが疑問で、どういうふうな参加の仕方があって、社員や団体の方々に説明することができるのかということがないと、協力しますよとか、そういうことが簡単に言えないのではと思うのですが。ちょっと抽象的になり過ぎて。

例えば具体的にボランティアのジャンルで、実は社会でこういうボランティア、こういう分野のボランティアが今必要とされているので、そういうところの例えばこの企業さんならこういうところが得意であれば、こういうのに参加していただくとか、メニューがあれば、じゃ、うちの会社として、あるいはうちの団体としてこういう分野でボランティアを募ろうとか、そういうように具体的に見えてくるのではないかという気がするのですが、いかがでしょうか。

**【山崎分科会長】** いかがですかね。漠然とボランティアしたいという気持ちはあるんですけども、何をしたらいいのか、どういう方法なら参加できるのか、そのところがなかなかつかみ切れないんですね。

**【澤田委員】** 具体的に。

**【山崎分科会長】** だから、どういうボランティアが必要なんですよ、こういうメニューがあるんですけど、いかがですかというふうにしたほうがそれぞれの企業は参加しやすいのではないかと。いかがですか。経団連さんなど、なかなかこれは。

**【萬屋委員】** 担当者としての印象としては、今、澤田様がおっしゃっていました件、企業の方はボランティアに対して関心があるかないかといったら、比較的あるほうだと思います。特に経団連の会員企業で社会貢献に担当者を置いているような企業においては、ある程度理解はあるし、実際に協力をしているというところはあると思います。その上で、

気運醸成のところに関連しますと、企業の方々としては特定の方、全体の2割ぐらいの方には届いて実際に参加してもらえるものの、残りの8割、普通の社員の方には届かない。そういったとき、決めの問題ではあると思いますが、2割の方を大事にするというのか、それとも残り8割の方を広げにいくのかを考える必要があります。会社によって考え方が違うとは思いますが、考え方次第でやり方は変わってくるのではないかと思います。以上です。

【山崎分科会長】 どうですかね。特定の方には情報が届くんですけども、そうでない方、無関心の方もいらっしゃる。そういう方にも広げるのか。それとも、すぐやろうと言ってくださって、立ち上がった方々を中心にやるのか。関心というところが先ほどおっしゃってくださった澤田さんのご意見ですよね。関心のあるメニューを用意しないと参加の仕方が難しい。

【澤田委員】 実は、私も以前企業で社会貢献を担当しておりまして、社員に働きかけてきたのですが、今おっしゃったとおりに、関心のある方がリピーターになって、広げていくというのがとても難しいですね。気運醸成の活動のターゲットをどうするのか。2つあってもいいと思うのですね。具体的に関心の高い方たちに次のステップアップしたことをしていただく。気運醸成は気運醸成で、そういうことが得意なことでやってゆくというような。とにかく今おっしゃっていただいたことは、例えば企業でも、社会全体でもそうだと思うのですが、大きな課題だと思います。ほんとうに広げていくということが。すごく共感いたしました。

【山崎分科会長】 どうぞ。

【鈴木委員】 私たちの地域では、社会貢献室を持っているような企業というのはほとんどないというのが現状です。でも、じゃ、取り組んでいないかという、そうではなくて、商店街をはじめ、いろいろなところが実はいろいろな活動をしております。多分、次のメニューにもかかわるのかもしれませんが、大きな企業だからこそ、社会貢献室を持っているからこそできる活動、それから、小さな個人主も含めて、できる活動はそれぞれタイプが違うような気がします。多分小さな会社ほど、地域密着型のボランティア活動の展開をしていると思うので、そういうさまざまな立場の企業、あるいは事業主さんが参加できるようなプログラムが紹介されていくことが大事なのかなと思うのと、そういう小さなところも取り組んでいるところをぜひご紹介していただくことが、自信を持って取り組んでいただく、私がいつも申します光を当てるところにつながっていくのでは

ないかなと考えます。

それと大きな企業の方たちの社会貢献室でのボランティア活動は、多分地域密着型よりも課題テーマ型の活動をされているのではないかと思います。今ある課題に対して解決するというテーマで取り組んでいると思うのですが、もしかしたら社員さんの中には自分の住んでいる地域に視点を持って活動することもあるのではないかと思います。そんな事例ご紹介していただくと、参加する人たちがもうちょっと広がる可能性もあるように思いました。

【山崎分科会長】 つまり、架橋的といいますか、かけ橋になっていただくんですね。

【鈴木委員】 はい。

【山崎分科会長】 テーマ型の活動をされて、企業単位でやっていらっしゃる方が、今度地域に戻ると、地域人、会社人間が社会人間に変わりますから。そのときには、今度はそのでご自分も参加できるような地域の活動へと転換していただくというふうな、そういう両面を持っていくというのも大事だということと、地域における商店街がつながっていくという方法がある。今日、町会連合会の方もいらっしゃると思うんですけど、いかがですかね。

【鎌水委員】 町会連合会事務局の鎌水でございます。

【山崎分科会長】 地域密着型。

【鎌水委員】 町会、自治会では、今話にも出ましたけれども、地域の行事、地区のお祭りとか、桜祭り、盆踊り、餅つき大会、そういったものをやっていて、基本的には町会、自治会の方々、まさにボランティア、手弁当で参加していただいているんですけども、地域の商店街の支援団体、地域のつながりを持つために、地域で顔と顔の見える関係性をつなげるためのイベントなので、地元の商店街の方であるとか、学校とか、大学生の方とかいう方に参加していただいているケースは実はよくあります。そういった方々が、さらにもっと増やす方向で動いているんですけど、なかなか進まないところもあるので、企業であるとか、地元の大学であるとか、町会、自治会からの発信も必要だと思うんですけど、そういったイベントをやりますよ、ボランティアが必要ですよということがうまくもっと伝わる、コーディネートと言っていいんですかね。そういったものが進められればいいんだろうとは思っています。

【山崎分科会長】 なるほど。地縁型の活動は地元の中小的企業が参加してくださる。そのきっかけになるのがお祭りとか、餅つきとか、いろいろなイベントですよ。私たち

も夏体験というのをやるんですが、そのときに企業の方で、例えば神田祭というメニューがあったとすると、そこに大企業の方がおみこしの担ぎ手がないからというメニューをアップすると、非常にたくさんの方が行ってくださるといふ、そういう交流は必要になってきますね。ありがとうございます。

大学生はいかがですか。学生を増やすのには。

【足立委員】 上から4番目のところにも関連するかと思うんですけども、大学生がボランティアに興味を持つというときに、調査の理由などにもあったと思うんですけども、他者へ貢献したいということもあると思うんですが、それに加えて、何らかの自分自身の学びにつなげるとか、そういったところの関心というのがすごく高いんじゃないかなと思っています。ですので、ボランティアに関心を持っている層を活動層にするというか、背中を少し押すためにというところで、先日、地域の社協さんでもやっていらっしゃると思うんですけども、ワンデーボランティアという1日体験のボランティアの企画をしたんですけども、それ自体はそんなに珍しくはないと思うんですけども、そこでかなり丁寧に事前学習とか、事後学習というものをやりまして、学生にとっての社会課題と向き合っただけ意識づけをするということであるとか、あるいは心の面で負担感を減らすということとかをして、体験の前に必ず事前学習、そして、終わってからの振り返りの事後学習というところをかなり丁寧にしました。そこですごく満足度が上がったりとか、今後も続けたいというような学生が出てきたりとかということがあったので、単なる活動の、もちろん魅力的なメニューを開発するというのも大切なんですけれども、それだけじゃなくて、事前、事後のフォローとか、そういったところの意識づけというのがすごく大事ななと思っています。

それともう一つ、すごくよかったなと思っているのが、東京都の教育庁さんとワンデーボランティアを連携させていただいて、本学が主催したワンデーボランティアに都立の高校生にも参加していただいたんです。その中で、大学生だけで体験するよりも高校生と一緒に体験したほうがお互いにとって学びが高まったというか、高校生の新鮮な意見からはっと気づくことも多かったので、そういう世代の、近いけれども、少し違う人たちの学び合いというのは効果がすごく大きかったと思っています。ですので、そういったところの連携というのがカタリバさんなどもいつもやっていらっしゃると思うんですけども、すごく大事ななと思っているので、例えばうちのプログラムに企業の方に参加してもらってもいいかもしれないですし、それも学生にとってはとても学びになるかもしれないので、



そういうプログラムの相互乗り入れといいますか、そういったことができるといいのかなと思いました。

【山崎分科会長】 ありがとうございます。たくさんのヒントをいただいています、カタリバさん、振られました、どうですか。

【鶴賀委員】 私たちがやっていることの紹介になってしまうかもしれないんですけど、今、年間1,000人ぐらい募集して、実数として活動してくれているんですね、大学生の方たちが。一番意識しているのは居場所と機会をつくるという、この2つです。まずはやりたいと思って来る子はいないので、友達がいるからとか、あそこ、ちょっと行ってみようとか、おもしろそうな人がいるからということで集まれる場所をつくっておいて、その中で隣の隣ぐらいでプロジェクトをやっている子がいると、何となくそのつながりの中でおまえもやってみようよみたいな話でやると。なので、まず居場所をつくってあげて、機会はあるよということをこちらから示してあげて、大学生のペースに合わせてやるということを結構意識してやっております。

あとは、仕組み化し過ぎると嫌がる学生もいるので、一番大事にしているのは称賛の場というか、先ほど光が当たるという話があったんですけど、コンテストとか、アワードとか、そういうものをつくっておくと、居場所に飽きてしまった子とか、こっちが与える機会に飽きた子でも何か賞を欲しくてとか、称賛が欲しくてやる子というのはいるので、その辺をいつも意識してやって。僕の中で体系的に考えられていないんですけど、思ったりしました。

【山崎分科会長】 事前、事後学習はされますか。事前学習、事後学習。

【鶴賀委員】 はい。

【山崎分科会長】 そういう振り返りの場面とか、準備の場面とか、ありますか。オリエンテーションとか。

【鶴賀委員】 それはすごい時間をかけてやりますね。

【山崎分科会長】 なるほど。やりっ放しの活動ではなくて、やる前の準備、実際に活動して、その後の振り返り、これはセットでやるというふうに癖をつけると、活動が定着するとか、活動の称賛につながるとか、いろいろありますね。事前、事後をしっかりとやりながら、あるプログラムを展開するというほうもあるし、それから教育庁とか、わりとそうなんですが、活動の参加者をいろいろな層を、プログラムを交えてやっていくということも大事な方法ですし、さらに言えば今のような仕組み化しないでおもしろそうとか、そこに

行けば居場所があるよとか、こっちの日程といいますか、いろいろなチャンスがあるよとか、そういうプログラムが固定化しないような、そういう柔軟な発想というのはすごく大事ですよ。なるほど。

大学生のボランティアを募集しますとか、こういう仕組みがありますとか、こういう取り組みですというのではなくて、その内容に今のようなものを盛り込んでいくということも大事な要素だというお話だったと思うんですが、それを仕掛けていらっしゃる、今日はボラセンとか、社協の方、いらっしゃいますけど、どうでしょうね。

【高木委員】 調布の社会福祉協議会、市民活動推進課の高木でございます。すごく学生さんの活用の部分で、典型的と、極端な例という形で、実は調布市内、幾つか大学があって、電気通信大学さんがあるわけですね。それで、うちの小さな地域のイベントの中で、地域の方から子供たちって電車が好きだから、プラレールとか、鉄道模型とかを使って何かやれないかというところで、電気通信大学の鉄道研究会さん——要はサークル活動ですね——に声をかけて、ご協力いただいて、子供たちが模型を運転する機会という部分をつくっていただいたことがあります。それが1つの例と考えると、例えば各大学にはさまざまなサークルとか、同好会とかがあるので、実は、それは学生一人一人からすると、自分の得意なこと、好きなことなのではないかなと思うんですね。それをサークルって身内だけで終わりになって、もしくは大学同士の試合があったりとか、交流があったりとかあるんですけども、それを地域に出していくことができないかなという意味では鉄道研究会さんの活動が1ついい事例になったかなというふうには思っています。

例えばテニスのサークルは子供たちにテニスを教える場面があってもいいと思いますし、よくプロ野球の選手が野球教室をやっていますけれども、何とか大学野球部主催の少年野球教室みたいなのがあったりすると、地域とのつながりというのが出てくるのかな。調布市の中でも生涯学習の部署のところでは、大学との地域連携というところが話し合いの場が持たれていて、どういう形のものかというものは、大学側としても模索しているところはたくさんあるということを伺っておりますので、そういうような形で全く初めてのことをやりなさいよりは、学生さん一人一人が得意なことを、これは地域の役に立つよという、そのつなぎ役というものを市民活動支援センターとか、大学のボランティアコーディネーター室とかがうまくつなぎ合うことができればいいのかな。多分大きな事業にはならない。地域の中で小さなことの積み重ね。それが評価されてくると、だんだん大きなものになるのかなという感じがしています。ありがとうございます。

【山崎分科会長】 今、東京だけじゃなくて、全国的に鉄ちゃんってたくさんいますものね。電車に乗ること、東京ボランティア・市民活動センターの前の副所長さんはものすごい鉄ちゃんだったんですが、あちこちそういうサークルをつないでいましたけど、そういう得意なものを持っていらっしゃる学生さんを1つに光を当てて、テーマ型ですね。それを幾つも、大きくは広がらないけれども、それから大学の中にいろいろなサークルがある。そのサークルが持っている力を一緒に地域の中に広げていくというようなことをやりながら、小さな積み重ねをして、地域と大学がつながっていくということもありますね。

先週でしたか、私ども東京ボランティア・市民活動センターで、大学のボラセンの発表をやってもらったんですけど、そのときに大学の中にアナウンス研究会みたいな、そういうクラブがあって、聖心女子大だと思んですが、広尾の商店街をカバーしているんですね。広尾の商店街を歩いていたらば、上から、こちらは聖心女子大の何々ボランティアセンターでございますというふうについて、今日私たちのところでバザーをやっています。商品を皆様から送ってもらいました。今日は何時から何時までやりますから、ぜひ来てくださいとか、清掃を一緒にやったりとか、水まきを一緒にやるとかということをしなが、商店とつながって、特殊なものを持っていらっしゃるサークルが呼び出して地域とつながるみたいなやり方をしていったり、初めて立ち上がった大学なんですけど、そちらは国際的な活動に力を入れたいという学校なんですけれども、そこはそういういろいろなプログラムをこれから地域に差し出していくというようなことを言っていりましたけど、学校によって持ち分が違いますから、それらを使って、地域とつながる。地域の持っているニーズに、ニーズ調査を始めたという大学がありました。地域のまちおこし、まちづくりへとつながるといふうな……。大学から学生さんが、今アルバイトがすごく大変なので、すぐぱっと活動に行かないんですけど、学生さんは好きならばやる、おもしろければ来るというようなところが、それを十分に活用しながら、今のようなサークルとか、同好会とか、専門分野とか、生かしながら、それを地域の中に引っ張り出すということも大学が地域に貢献する入り口という2つの事例はおもしろいですね。

称賛の場をつくる、光を当てるといふ話がありました。やっぱりまったりするのも大事ですし、居場所をつくるのも大事ですけど、さらにそこにいろいろな彩りを添えるということですかね。

さて、2つ目のところで、いろいろな普及啓発の方法とか、広く募っていくにはどうするかとか、話がありましたが、2020年大会の開催を控えて、大会関連のボランティア

活動に関心を寄せる人は多いんですけど、大会関連に加えてですが、関連以外のボランティア活動に関心を持ってもらうにはどのような話で大分つながっていったんですが、直接おもてなしとといいますか、大会のプログラムに参加する以外にどんなことを考えていったらいいですかね。東京に来てよかった、また、東京に行ってみたい。東京ではこんな思い出があったというふうな、世界中からいらっしゃる方々にいろいろなおもてなしがあると思うんですけど。

障害のある方がボランティアをしていた。ロンドンの大会のときにどなたかおっしゃっていたんですが、その方たちがボランティア活動していて、とてもそれが印象に残った。そこが私たちがこれからボランティアをやっていくときに、きっかけになったという方がいらっしゃいましたけど、東京の大会に参加して、直接2020年大会の関連ボランティア活動に関心を寄せる人が増えていただくことはすごく大事なんですが、それ以外のボランティア活動に関心を持ってもらうためにはどうしたらいいか。まさにレガシーなんです。

**【高木委員】** 再びで調布の高木でございます。調布市は、実は味の素スタジアムがあることでオリンピックの幾つかの競技が調布で開催されるという方向で話が進んでおる中で、今、市民側のほうからそれに合わせて調布のまちを知ってもらう、もしくはよくしようという動きがあります。市民が集まって、じゃ、オリ・パラが来るけれども、そのときに市民や市内の団体や企業とかで、調布のまちをよくする、もしくは諸外国、もしくは日本全国から人が来る中で調布のまちを知ってもらう、見てもらうためには何ができるかというのが市民レベルでの会議が行われて、何だかんだで26項目を挙げて、それを今投票して、そのうちの3つぐらいを何とか実現しようというような動きがあるんですね。結構おもしろいなと思っっているんですけど……。

**【山崎分科会長】** 投票なんですか。

**【高木委員】** 用紙で会議、それも自由に集まった人たちでこんなことをやりたい、こんなことをやりたい、70ぐらい挙がったうちから26ぐらいにまとめて、そのうちの3つをサイト上とか、紙ベースとかで投票して、上位3つぐらいを具現化しましょうというふうな動きなんですね。要はまちづくりの視点ということで、目標はオリンピック・パラリンピックに来てくれた観光客の方、諸外国の方も含めて、おもてなしであったり、それに合わせたまちづくりであったりとかということに視点があるんですけど、その中でいろいろなことができるね。それは外国語を使って観光資源に誘導できるとか、無料で使える

自転車をいっぱい用意しようとか、そんなのも出てはいるんですけども、そういうような形でのまちづくりにつながる。そのまちづくりは、オリンピック・パラリンピックが終わったら終わりではないので、そこによってできたものを次にどう生かしていくかの。もしくはそのときに集まった団体であったりとか、各種実行委員会であったりとか、生まれた組織がそれを継続して、地域のまちづくりであったりとか、スポーツの推進であったりということに進んでいけるというのがいいのかなというふうな形で、今うちのセンターも少し絡みながらも、そういう活動が行われているところです。

そういう意味ではオリンピック・パラリンピックで終わりではなくて、それをきっかけに集まった人たちの次の道筋をどう示していくのかということが多分大事なことで、それで終わり、よかったねではないような形での働きかけ。それは具体的にまだ何をというところまでは行ってないんですけども、チャンスとして捉えていきたいなというふうに考えています。

**【山崎分科会長】** なるほど。いかがでしょう。今のそこで終わりではなくて、次にどう生かすかを考えながら、今まちで投票されて、70ぐらい提案があって、今26に絞られてというふうなことで、まちづくりで集まった方々のつながりって大きいですよ。そこを実行委員会を立ち上げていच्छる。このきっかけをまちづくりに生かしていこう。無料の自転車はそこで終わりではなくて、これも観光に使っていくとか、いろいろ方法があるだろう。

どうでしょう。ほかの団体では今のような。これはすごく大事なテーマだと。どうぞ。

**【石井委員】** ありがとうございます。私も、今日が初めてなので、今までの議論を無視した発言になるかもしれませんが、今おっしゃっていただいた高木さんの発言は私も全くそのとおりだと思っていて、簡単に言うと、例えば外国人をお迎えするボランティアをした人は何らかそれがきっかけになって、簡単に言えば通訳ボランティアとか、翻訳とか、外国人支援の分野にそれをきっかけに、せっかく気持ちのいい思いでボランティアを終えられた人はこれから先探され始めるはずで、そういうときにきちんとガイドというか、もちろん私たちの団体ではウェブサイトとか、SNSを通じて頑張りますけれども、もう少し仕組み的にそれぞれ関心を持った方々が次の道に行かれるように、そこで終わりにしないような形にすれば、歩どまりを非常によくできるという意味では、私たちもそこは期待したいところではあると思っていまして、全くおっしゃるとおりで、終わる前からというか、仕掛けるときからそれを想定した仕組みに、もし全体としてしていかれるので

あれば、私たちとしては大変歓迎だと思っています。

一方で、数の問題で言うのであれば、気運醸成というもののインディケータというか、指標をどこに置いていらっしゃるか、ちょっとわからないんですが、例えばボランティア活動の参加状況である今、この表を、数字を上げるということを考えるなら、おそらく戦略的には上から子供、まちづくり、それから、今回のきっかけなので、スポーツみたいなところは見てもいいと思うんですけども、私たち個別の団体は別にボランティアさんに活動するために活動しているわけではもちろんなくて、日本に来た難民の人たちが、あるいは外国人の人たちが住みやすいようにするというようなところにもっと参加していただきたいと思っているとすれば、申しわけないですけど、ちょいボラではやっぱり——それを用意できればできるに越したことはないんですが、なかなかそれは難しくて、困った人1人来るだけでも大変な騒ぎになる私たちの活動なので、どうしてもセレクトティブにやらざるを得ないという意味では、ひょっとしたら指標の中に、もう少し専門的な意味でのボランティアさんという人がどれだけ育ったかということも入れていただけるような数字になるのであれば、やりがいも増えると思うんですね。

幾つかの企業さんと確かにタイアップは私たちもできていて、主に外資系なんですけれども、最初はプロボノという形で自分の専門を生かして入ってきた方々が、次にはもっといろいろなことをやってみたいとか、それだったら私もできるといって、社内で仲間を増やしていただいたりとか、そういうきっかけになるということは、リーダーづくりというのも実はすごく重要な気がしてまして、そういう意味では学生さん以上に大人のほうに私たちはどうしても関心があるんですけども、そういう意味で企業さんも含めて、何かボランティアしようとして盛り上がったきっかけを次のステップにしていくためには、先ほど特定の方に集まっちゃうという話もありましたけど、一方で、特定の方が動きやすくする。つまり、ほんとうにやる気があって、リーダーシップのある方が動きやすい環境をつくっていただくのも大変重要なことかなと思いますし、それをアワードできるような体制が全体としてあれば、非常に隔々まで、そういう意味では行くのかなと。数を増やすことだけではなくて、数だけだったら申しわけないですけど、国際協力とか、外国人支援はやらなくても数字に影響がないですから。でも、私たちから見れば0.7%からが1.0になるだけでも大変な効果になるので、そういうところもし目配りいただけるなら大変いい仕組みになるかなと思います。ありがとうございます。

【山崎分科会長】 大変貴重なご意見をいただいたと思いますね。参加状況から考える

と、確かに1つのきっかけになっていくかもしれないんですけど、これがすぐプログラムが終われば終わりということではなくて、最初からそういう方々をリーダーシップを持っていただけるようなリーダーづくりも一方でしながら、それを盛り上げていけるような1つのきっかけとして動きやすく活動できる場の提供も大事ですし、その人たちが、まだその先があるよというふうに、その先に歩いていける階段ですね。そこをつくっていくためにはアワードの仕掛けもあるでしょうし、それから専門的なボランティア活動というものが持っている意味、あるいは位置、役割をもう少し社会的にも認知できるように。確かに企業の方々が、例えば社会的養護の子供たちの学習支援に入ってくさっている家庭で子供の貧困に気がつかれて、子供の貧困問題ってこんなに奥が深いのか。ならば、こういうことをやってみよう。これを少し専門的に育ててみようというふうにおっしゃってくださったり、これを社員の中に広げていこうというふうに言ってくださって、社員の60%がその問題に取り組んだ企業がありますし、逆にプログラムを多彩に広げてくださった企業もありますし、だから、そういう意味では入り口づくりで終わるのではなくて、そこからどう階段をどう上がっていけるのかということが、特に日本語ボランティアさんとか、外国語のボランティアさんという方々が語学だけやっている。そこが私たちも非常に難しいと思っているんですが、例えば視覚障害の方に点字をやっている。今新しいコンピューターにかわっていますけれども、その人たちはそのマニアックなことで終わってしまう。実際には障害のある方と一緒にこの問題を共有して、例えば日本で言えば、内なる外国人がたくさんいらっしゃいます。外国人支援。そのところも実はなかなかできないというふうなところがあるので、この仕掛けはほんとうはかなり正念場の仕事になると思うんですけど。

お話は非常によくわかるんですが、どう仕掛けていくか。リーダーをどう育てていくか。それから専門的なボランティアが活動しやすい、動きやすい環境をどうつくっていくのかというのを一方で考えていくことによって、その魅力が周りに光を当てたり、アワードになっていったりということはあるですね。なかなかこれはどうしたらいいですかねという大きな問題。私たちも直面しています。

【石井委員】 もう1点いいですか。

【山崎分科会長】 どうぞ。

【石井委員】 言うつもりで言い忘れたことが最後にありまして、そういう空気感、特にNPOは正直、カタリバさんのように先ほどおっしゃったように、ほんとうにプロフェ

SSIONALで、どうモービライズできるかということが出来るNPOは多分限られていて、私たちみたいに、おそらくは必要に応じて、必要な数だけ、あまり多過ぎてもハンドルできないということになっていく。そうすると、大事なことの1つに、ボランティア活動はどうしても体を動かさなきゃいけないと思う傾向が大きいんですが、そこに寄附するという要素を、実はボランティアのいい形として入れていただけないかと前から思っています。これはやっぱり両輪なので、動かすエンジンとガソリンの関係とよく言われる。お金という部分でしか参加できない。つまり、時間がないと言っている方なんかは主にそうですけども、それがどれだけ意味があることなのかというのをきちんとお知らせする意味でも、きっかけはお金からで、後から時間ができたら子育て終わったら、具体的にという方々の呼び水にもなると思いますので、寄附に対する考え方の盛り上げも同時に考えていかれたら、変わってくるんじゃないかなとは思っています。

【山崎分科会長】 なるほど。そうですね。活動に体を動かすことは時間がなくてできない。いろいろな事情でできない。でも、気持ちはあるんだという方の場合には、寄附の作り方をもう少し工夫する必要があるということですね。どうやったら寄附につながるのか。寄附のチャンスをいろいろつくっていく。あるいは寄附の募り方を工夫していくなど、ここにいろいろな知恵を出していくということも必要だとおっしゃる話です。いかがでしょうか。どうぞ。

【鶴賀委員】 ちょっとそれしてしまうかもしれない。ちょうど今、石井さんがおっしゃられた、気運を醸成する、そういうことができたかできなかったかという指標、インディケーターというのは今あるのか、ないのかというところで、これは活動を押しえると4割、2割という数字があるんですね。

【猪俣地域活動推進課長】 では、ちょっと。1つの指標としてオリンピック・パラリンピックが2020年に東京で開かれますので、それを契機としてボランティア文化を定着させると。その先に我々からすると共助社会の実現というところがあるのですけれども、その1つの指標として、平成26年12月に東京都が出した長期ビジョンの中で行動者率40%という目標を、2020年に前倒して掲げています。

今、ボランティア団体さんなどは、活動の形態によって別に数字にとらわれないというご意見というところもあると思うのですが、都としては40%を、みんなで支え合うという社会が実現するだろうという1つの指標として捉えています。

先ほど萬屋さんがおっしゃったように、2割の方にターゲットを絞るのか、8割の方に



ターゲットを絞るのかという話になってくると、我々の目指している形からすると、やっ  
ていらっしやらない8割の方に働きかけていかないと、20代、30代の方が少ないとい  
う傾向からすれば、行動者率が上がっていかないと。いろいろなご意見があると  
思いますが、東京都としては40%という目標を掲げて、行動者率を上げていきたいとい  
う思いでやっております。

【鶴賀委員】 ぜひそこを私も決めるのであれば決めて、ぶれずに考えていくというこ  
とが今後大事になるかなと思っております、4割を必ず達成すると。数字だけ追うとなっ  
たときに、40代、一番参加しやすい層を徹底的に狙っていくということはあれですけど、  
囲んでいって、数字だけ達成するということもできるでしょうし、先ほど石井さんが言わ  
れたように、20代は一定数、4割の中でも何割かは20代を獲得しましょうとか、ほか  
のマーケティングとか得意じゃないんですけども、そういうプロを雇うと、いろいろな  
戦略があるんだなと思えました。

あとは、気運がある状態というのはどういう状態なのかというところを定量だけではなくて、定性でももっと言語化して、この場で求められていくことだと思っておりますけれども、  
おそらくこういう状態のことを言っているよねということ、すごく難しい問いだと思  
うんですけども、話をできるといいのかなと思っております、目的は何なのかという、ちょっ  
と難しい問いを話していくのかなと。今石井さんの話を聞いて、少し思いました。

【山崎分科会長】 定量的な数字として40%というのが目標としてはあるかもしれな  
いけれども、定性的に見ていくと、その構成とか、内容とか。済みません。定性的にと  
いう中身は。例えば私が言うのであれば、ボランティア活動をするのが当たり前の社会とか、  
ボランティアをしていないとちょっと恥ずかしいと思うような社会とか、ボランティアが  
日常生活の中にしっかりとしみ込む社会、当たり前の社会とかということになると上がっ  
ていくと思うんですけど、何か定性的ということになると、目標になると思うんです。ど  
んなことか。

【鶴賀委員】 そうですね。私もイメージのないまま言ってしまったんですけども。い  
ろいろな方々に大会後に活動を促していくであるとか、団体の方に協力を促していく中で、  
こういう状態をつくりたいから、協力してほしいんだということを説得できるような言葉  
であればいいんじゃないかなと思っております、それがどういう言葉の粒感というか、表  
現のレベルなのかは、ほんとうにビジョナリーな言葉一言でいいのか。もうちょっとわか  
りやすい言葉なのか。

例えばオリンピックが終わった後に、たくさんの企業が普通の社員も、一定の社員だけじゃなくて、参加していて、土日もアクティブになっているような状態とかいうようなことを、まず……。数字ではかることもできるんですけど。何と言えいいんですかね。できる限りイメージするという意味で言いました。済みません。

**【山崎分科会長】** 何かそこをどういうイメージを持つのかということもあるかもしれませんがね。先ほど猪俣課長がボランティア文化の醸成とおっしゃったと思うんですけどね。文化というのは、生活の様式という意味ですから、そういうボランティアをするのが当たり前のような生活の様式が皆さんの中に人々の中に、そうなったらいいという意見もありますよね。

なかなかここはそのようになっていくのは、教育の、先ほど教育庁とも一緒になって、高校生も大学生も一緒にやったとかいうのがありますけど、企業の中におられる方が企業人でもあるけれども、社会人でもある。その方が地域の中でご家族と一緒に、地域のボランティア清掃に行ったとかいうのもあるかもしれないし、いろいろ仕掛けの仕方を考えていかなきゃいけないということですよ。

そこでメニューのほうに移ってみたいんですけど、多くの方がボランティア活動に関心を持てるようにするため、先ほどの話ですが、さまざまな分野の活動事例を紹介するウェブサイトの構築を現在検討しているということですが、どのような事例を収集したら効果的か。そこはいかがでしょうか。皆様のご意見をいただけますかね。どんな事例を集めたら効果的か。あるいは、どういう情報を収集したらよいか。グッドプラクティスを事例集にするとかいうことも考えられるということなんだと思います。それだけではないんですが。

先ほど人と人のつながりによってボランティア活動に参加した方の割合が、第一調査報告で多かったんですよ。人と人がつながることによってというのがあったんですけど、一方で、私どものボラ市民ウェブの浸透率がほんとうに低いということが今回の調査で見えてきているんですけど。しかもSNSなんかあんまり使ってないということがわかって、ちょっとショックなんですけどね。

**【鈴木委員】** いいですか。

**【山崎分科会長】** はい、どうぞ。

**【鈴木委員】** 先ほどでました寄附について、私はとても大事だと思っています。地域の中でさまざまな活動を展開していますけれども、自分たちでお金を集めるというのは非

常に大変で、活動することにエネルギーを使いたいと思うと、寄附を集めるためのエネルギーは非常に負担になってくるんですね。より多くの方々にいろいろな活動に対して関心を持っていただいて、まずは寄附をするという方法もボランティア活動の1つだということ、気軽にいつでも誰でもできるボランティア活動としてご紹介するのはとても大事だと思います。先ほども言いましたように、企業についても自分たちの得意とする、もともと餅屋は餅屋の活動というのを生かしながら取り組んでいる活動のご紹介もあるでしょうし、テーマに沿って、プロボノのような活動など紹介していただけるといいのかなと思います。ただ、読んでもらうための工夫が必要だと思います。ボランティアガイドはたくさん出されているのですが、じゃ、ほんとうに必要な人が手にとるようなボランティアガイドにするには、どうつくっていくのか。多分内容は幾らでも集められると思うのですが、今、参加している団体だけでも素晴らしい事例をたくさん持っていると思うのですが、その事例をどう紹介すれば皆さんがほんとうに手にとって読んでもらえるのかというところがとても大事になるのかなと思います。

【山崎分科会長】 事例はいっぱいあるけれども、得意とするところもあるし、寄附のほうについてもいろいろあるんだけど、テーマに沿った活動もあるんだけど、どう紹介すればいいのか。手にとってくれるのか。

【鈴木委員】 やっぱり手にとってもらうための工夫が求められますね。……。

【山崎分科会長】 どう紹介すれば、どうしたら手にとってもらえるか。その工夫。いかがですかね。どうぞ。

【高木委員】 地域でやっぱりさまざまなボランティア団体だとかに接点を持つと、仲間を増やしたいとかということでも、広報媒体というものは常に話題になって、でも、行政の出している広報紙に載せるとか、社協の出している広報紙に載せるとか、ホームページに載せるとか、ごく一般的なことは普通にできるわけですね。でも、それって誰が見るのか。基本的には、行政の出している広報紙は調布市民の中では比較的に見られているだろうというところでは、市報という広報紙では。何を見てきましたかということ、それが多い。東京都の広報紙がどれぐらいのレベルなのか、ちょっとわからないんですけども、身近なところの身近な情報で、それを必要としている人は必要な情報を見るんですけども、うちの社会福祉協議会で福祉の窓という広報紙を出しているんですが、市報と両方比べると、福祉の窓のほうが圧倒的に見ている人が少ないですね。同じように全戸配布しているんですが、それは福祉という名前がついているがために、俺はまだ必要じゃないと思

う人は新聞のポストに入っているものから、そのまま古紙の箱へ行ってしまふ。そうなら  
ないための工夫というのは、今までは広報媒体ではないものとかというものでという  
と、答えがまだ見つけ出せてはいないんですけれども、それには例えば企業さんであつた  
りとかの中で、企業なんかだと個人端末に全員に「いっせいのせ」でどんと行くようなシ  
ステムはほとんどのところが持っているかなと思うので、そういう中の情報ツールとして、  
今度こんながあるよというものを載せてもらえんとかというふうにして、今まで手にと  
ることがなかった人、目にすることのなかった人、学校の中でもそうだと思いますね。学  
生向けの情報発信みたいなのが、授業だ何だかんだは多分全員が見ると思うんですけれ  
ども、そうじゃない部分についてのごく一般的な方、ボランティアに興味のない方々への発  
信という部分は今ある既存の方法ではないものというのが、済みません、見つけられてな  
いんです。ので、そこは企業の力とか、実はこんなシステムがあるよというのはひそかに持  
っているところがあるんじゃないのかなという。企業内ではこんな情報ツールを使ってい  
ますよみたいながあると、今まで目にしなかった人が目にとめるということはあるのか  
なというふうには思います。

調布でやって、もうそろそろ終わりになるんですけど、東日本大震災の復興支援活動に  
ついて、幾つかの企業さんから多額のご寄附をもらいつつ、その社員さんが参加して  
くださっている。それは社員向けに、一斉に、今度、何月何日から3泊4日行くよという  
のが流れて、それに手を挙げてくれる方がいるから参加者がいるんですけれども、そうい  
うような形でそこは企業さんとか、学校さんなんかが大勢の方に向けての発信というも  
のができると期待しちゃうところがあるかなというふうな気がします。多分そこは我々で  
はなかなかできない、地域ではできないことなのかなというふうに思っていますし、そう  
いうところが今後必要になってくるのかなと思います。

【山崎分科会長】 そうなんですよね。私たちが今苦しんでいるのはそこなんです。ね。  
従来のあまりボランティアに興味がない人にこのことに関心を向けてもらう。きっかけに  
なる媒体をどうつくっていくのかというところがなかなか答えが出てこない。調布さんの  
場合には広報媒体をつくる企業の方が非常勤さんで入っておられて、その方が、実は今度  
の災害のときに、日本全国あちこちから呼ばれたんですけれども、味スタの広告を、味ス  
タに東日本の被災者の方が大勢集まったときに、あのときの広報の仕方、それから、ネッ  
トのつくり方に私たちはすごく脱帽したといいますか、ほかのところとは全く違ったん  
です。

今度大島で災害が起こったときに、大島はウェブもないし、何も広報媒体がないときに  
行っていただいて、立ち上げてもらったんですけれども、そのときのメッセージの出し方、  
4行ぐらいのメッセージだった。それは皆さん、全国から非常に称賛をもらったんですけ  
れども、あのメッセージはわかりやすかった、あのメッセージならわかったというふうに  
言っていたことがあるんですけれども。その方は広報媒体をつくる専門家なんです  
よね。という方が、多分隠し玉があちこちにあるだろうと。その知恵をもらえないかとい  
う話なんですよね。今おっしゃっているお話の裏側のことをちょっと話すと。どうぞ、山  
本部長。

【山本都民生活部長】 都民生活部長の山本でございます。今、我々のほうで考えてい  
るのは、ボランティアに関する情報というのは、確かにいっぱい出ていると思うんです  
ね。ただ、分散していて、見る人が興味を持って検索にいかないのとどつつかないとい  
うところが、そこにどう誘導するかというところは多分うまくいってなくて、たどつ  
ついてないんじゃないかと思っているところなんです。

関心のある方はいいんですけれども、あまり関心のない方にどんなボランティアがあ  
って、どんな活動が、どんなところがしているのかというのを一覧で見られるような  
サイト、例えば入り口になる部分のサイトがあって、そこにかなり豊富な情報が、ス  
クロールしていけば、自分の興味のあるものが、これ、いいかなというふうに見てい  
けるようなものもあれば、そこから先の詳しい情報についてはリンクを張って見てい  
てもらおうということができるとは思うんですけど、まず何があるかということがよく  
わかってない。多分、ボランティアはいろいろなものがあるんだろうな、こんなもの  
があるんだろうなという、想像でしかないと思うので、そこにたどつつけるような  
ポータルサイト的なものをつくって、なるべくたくさん分野別とかという形で活動  
情報を集めて、紹介するサイトが1つあると、そこから先に進んでいっていただけ  
るんじゃないかなというのを感じていまして、そんなものがつくれると、例えば企  
業さんの取り組みについてもっと関心を持ってもらったり、それぞれのボラン  
ティア団体の活動に関心を持ってもらう方が増えていくのかなというのがちょっと、  
そういうものができればなど。確かに情報はたくさんあるので、関心を持って調  
べていけばたどつつくんですけど、そこに行くまでのところがまだないので、そ  
ういう入り口をつくっていくことがきっかけづくりになるのかなということで、我  
々は考えているところであります。

【山崎分科会長】 うちでやっている夏体験ボランティアのリストのようなものなんで

しょうね、おそらく。7つぐらいのプログラムができ上がりますから、それを分野別だったり、地域別だったり、できるようになっているんですけども、ぱっと一覧表で、夏だけなんですけど、出てくるんですね。そういうやり方が、確かにそれは売れ筋が多くて、あつという間になくなって、紙媒体もしていますから、持っていつてくださるんですけども、それを具体的に見ていただいてそこから詳しいとか、そこですよ。そこをどうつくるかという、先の橋のかけ方ですかね。集めることはやっていますし、できるんだけど、この先をどうつくるか。どうぞ。

【鈴木委員】 私たちも実際に広報活動、すごく苦勞しています。が、いつも思うのは、区立図書館とか、一斉にボランティア活動についてのポスターや情報が見られるようになると、関心を持つ人が増えるのではないかなと実は思っています。図書館はさまざまな世代の方々が、子供から社会人も含めて利用されていると思うんですね。

もう1つ、生涯学習の分野等で取り組んでいるボランティア活動と、私たち社会福祉協議会のボランティアセンターで取り組んでいる活動が縦割りになりつつあるんですね。また、環境ボランティアや、今、東京オリンピックに向けて、新聞でたくさん取り上げているので、スポーツ関係のボランティアさん、東京マラソンへもたくさんボランティアさんが参加しているのだと思うのですが、自分たちの地域とリンクしてこないんですよ。参加している方々と私たち自身もつながるような工夫を、ボランティアセンターもしなければならぬと思っています。先ほどの調査で見ると、あまりウェブページとか、SNSを使ってないというのを見ると、紙媒体で見えるものというのもとても大事になってくるかなと思い、公共の図書館などでボランティア情報が、一斉に紹介されるような場、あるいはボランティア活動のウェブページができたので、ぜひ活用してくださいも含めた情報などの工夫ができないものかなと思いました。

【山崎分科会長】 いろいろな公共の場面、特に図書館ですね。今、部長がおっしゃったのは、東京都がそういうリストを公開するというお考えですか。

【山本都民生活部長】 はい。

【山崎分科会長】 なるほど。東京都のホームページだと皆さん見るかもしれませんね。どうぞ。

【杉崎委員】 今、鈴木先生のご発言もそうですし、冒頭部分で、澤田さんのご発言もありましたけど、先ほどの調査結果を見ても、自発的に自分で情報を探してボランティアをやる人がそんなに多くない。そこをいかに底上げしていくかというのが重要なミッショ

ンだと思うんですね。底上げしていくためにはボランティアのいろいろなメニューの提示、さっき部長がおっしゃったようなポータルサイトでのメニューの提示もいいと思いますし、ボランティアには、いろいろ目的ですとか、地域という要素ですとか、いろいろな切り分け方がありますので、そういった情報を、例えばこの地域のボランティアで、こういう目的というのを選択したら、こんなボランティアを今、募集しているよというのがわかるような仕組みづくりが大事なんじゃないかなと思うのが1点です。

もう1点は、いかにボランティアをやっていただくための仕掛けとして、今、山崎課長のところでおもてなし語学ボランティアをやっていらっしゃって、受講者の方に定期的にいろいろな情報を出すとか、イベント情報を配信していらっしゃる。オリ・パラのボランティアについても、これから9万人想定されているわけですから、メールの配信システムでもいいと思うんですけれども、東京都さんがやっている取り組みに絡めて仕組みを構築するところが大事なんじゃないかと思います。今、ちょうどオリ・パラ局さんのほうでもパラスポーツの普及促進で、BEYONDという仕組みも構築していますので、そういうのを具体的に展開していくのが大事なんじゃないかというのが2点目です。

あと、いわゆる気運醸成全般という意味では、これだけ都政に注目が集まっているわけですから、この機会を捉まえて、いかに東京都さんの取り組みをメディアを通じて広く発信していくかということが大事なんじゃないかなと思って、皆様の議論を聞かせていただきました。

**【山崎分科会長】** なるほど。東京都自身が今のようなオリ・パラのBEYONDとか、9万人のメールとか、いろいろなことを通じて、東京都自身が気運醸成のための広報媒体を使ってやっていらっしゃる。これを仕組みにして落とししていくという作業と一緒につながっていくと力になってくるというお話ですね。ほんとうに貴重なお話だと思いますね。どうぞ。

**【足立委員】** ちょっとずれてしまうかもしれないんですけれども、本気で裾野を拡大していこうと思うと、本気でボランティア活動を推進していく、我々ボランティアコーディネーターを増やしたりとか、養成したりとか、力をつけたりとか、あと本気になるということが重要だなというふうに思うんですけれども、そういうグッドプラクティスな魅力的な活動の事例というのもとてもいいと思うんですけれども、そこにあわせて、いい事例の背景にはきっといいボランティアコーディネーションがあるかなと思うので、どういうふうな準備をしたのかとか、どういうふうに働きかけたからこんな楽しい活動になったのか

とか、そういうボランティアコーディネーションの事例もそこにセットで見ると、我々にとっても、とてもまねできる、参考にできるものになるなというふうに少し思いました。

ボランティアコーディネーションの事例にしても、単に事例だけじゃなくて、私たちもたまに事例発表とかさせていただくことがあるんですけども、そういったとき、あの大学だからできるんだよねとか、あそこの企業だから、大きい企業だからできるんだよねみたいところで、特別な事例として思われちゃうところがあるんですけども、そうじゃなくて、そうじゃなくて、こういう働きかけのポイントは誰でもできることなんだよということを、単に事例を載せるだけじゃなくて、ポイントの分析みたいところをした上で、みんながまねできるような、参考にできるような事例集とかになるといいのかなというふうに思いました。

**【山崎分科会長】** ありがとうございます。貴重なご意見ですね。ありがとうございます。澤田さんのところはメセナですから、見せ方とか、いろいろな工夫があったと思うんですけども、何かご意見はありますか。

**【澤田委員】** やはり私ども、企業や団体の集合体ですので、それぞれの企業が知恵を絞っていろいろアピールしているわけですね。こういうボランティア活動とか、社会貢献や、文化支援など、やっていくことが企業価値にも通じるし、もう一つ、社員の人材育成にも通じるという認識だとも思いますので、各社がその特徴を活かして活動していらっしゃいます。方針がおありになって。企業メセナ協議会としてはそれを全体としてどうアピールしていくかということですので、この会合で、例えばいろいろな各企業さんがいらっしゃいますので、会合のときにこういう形でやっているの、その企業のこういうところを活かす方法もありますよとか、そういうお伝えをすることができると思いますし、あと特徴のある企業同士、団体も含めて、連携するということもこれからすごく重要だと思います。企業単体でやるというよりは、地方の自治体もそうですけれども、いろいろな連携で1つのことをなし遂げていく、やっていくことが点じゃなくて面でやっていくということを中心にかけていく方向にあると思います。企業メセナ協議会としてもいろいろな連携のサポートをするという役割もありますので。ただ、どのようにアピールしていくかというのは、先ほど会長がおっしゃったように、プロの力も必要かと思います。ただ、あまりお金をそれにかかるというのも大変ですし、そんなにかけれないので、プロボノなど、そういうことでやっていただく形もあると思います。それにはどう伝えたいかという、こちら



の思いもちゃんとないと、正しく伝わらないことになりますので。やはり多様な媒体を使ってメッシュ構造かなんかでやっていかざるを得ないかなと。気運の醸成というのは。というふうに思っています。

【山崎分科会長】 多様な媒体、多様な専門職、あるいは多様なメッシュ構造をそこにつくっていく。なるほど。

【澤田委員】 そうですね。それをうまくやってゆくのに、これだけだということではないと思いますので。ただ、それを整理するのがやはり重要かなと。いかに整理するか。

【山崎分科会長】 そこでプロボノのような企業社員が行うボランティア活動の紹介として事例を集めるのにはどうしたらよいかというテーマがもう1つあるんですけどね。

【澤田委員】 それは私どもの会員企業さんや全体に関しては、経団連さんなどもそういう情報をお持ちですし、企業に関しては情報は集められると思います。

【山崎分科会長】 なるほど。

【萬屋委員】 今のお話しに関して、例えば経団連の中でも、例えば社会貢献の担当者の方が集まって、そこで各社の取り組み等を互いに勉強する場を設けています。足立委員がおっしゃった事例紹介もさることながら、少人数の非公開の場ということもありまして、うまくいった理由、失敗した理由、ちょっとした工夫を学ぶ場が、我々の団体の中には用意されています。そうは言っても、これを広く公開するとなると、言いづらい部分、その場限りでとどめておきたいこと、知られたくないこともあります。本音ベースでお話をできる場というのは、非公開で少人数だからできるところもあるのかというふうに思っています。

今のお話を伺って、東日本大震災の取り組みについて、知恵の集積というのをやっている企業さんを思い出しました。そういったサイトを参考にされるのもよいかと思います。「未来への学び」プロジェクトをグーグルさんが立ち上げ、ここでは企業やNPO等の取り組みを紹介する中で、こういうところがうまくいった、こういうところを工夫したといった情報がまとめられています。単に何をやったかというだけじゃなくて、工夫等をあわせて紹介する潮流がもう少し社会貢献の業界の中で広がっていくとよいかもかもしれません。ボランティア活動の気運を整えて市民や社員の方に求めていく一方で、社会福祉団体や企業の社会貢献担当者はそういった情報を残しておくのも大切ではないかと思いました。以上です。

【山崎分科会長】 ありがとうございます。社会貢献担当者の会議をずっとやっていら

っしゃいます。私たちも時々呼んでいただいたりしますが、そこでは皆さん、本音で話していらっやる。そういう本音で話せるような場をつくって、そこからいろいろな学びをしていく。うまくいったこともあるし、失敗もある。ということも含めながら、そういうサイトを大事に育てていくといいますか、多様なサイトをつくっていくということも大事だというお話でしょうかね。ありがとうございます。そういう気運を整えていくという場をつくっていくということが大事という話だったと思います。

済みません。時間がどんどん過ぎまして、必ずしも全部のことができていません。ちょいボラの話もまだ十分ではないんですが、何かこの際、言っておきたいがありますか。じゃ、短くお願いします。

**【高木委員】** 今のメニューのところでは参加した個人の感想みたいな、初めてそこに参加して、そこからどっぷりはまっていった人なんかも多分いると思うので、そういう立場の方が、自分が参加したきっかけはどうだったとか、何によって、ここに楽しさややりがいを見出せたのかというのは、個々それぞれ違うと思うんですけども、入り口のところで、私はこう感じたから続けられているよみたいなのを発信していただくと、初めてやる人にとっては、ああ、そうなのねと思えるところ。この部分については、学生だろうが社会人だろうが、極端な話、中学生だろうが、発信できるものだと思うんですね。私がこれを始めたきっかけみたいなところ。そして、例えば5年前にそのきっかけをやって5年先でも続いているよというようなことを出していただくと、入り口としてはわかりやすくなるのではないかなというふうに感じています。

**【山崎分科会長】** ありがとうございます。確かに体験された方の入り口の体験を語っていただくというのは、最初の入り口としてはこういうメニューがありますよということ以上にもう一步そこに肉や厚みがついてきて、その感想が次の活動のきっかけの入り口になるという可能性があるので、入り口に体験を集積して、それを配信していくということも大事だというお話だったと思います。ありがとうございます。

時間が11時40分まで、70分ぐらいというふうに予定していたんですが、時間を過ぎしております。ただいま皆様からいただきましたご意見ですが、事務局と整理をさせていただきますので、取りまとめて、第2回の東京都ボランティア活動推進協議会において報告させていただいてよろしいでしょうか。

ほかに桃原次長、お話しありますか。どうぞ。

**【桃原生活文化局次長】** どうもたくさんのご意見をいただきまして、ありがとうございます。

いました。まず、最初の調査のほうのご意見をいただいて、その後、いろいろなご感想をいただいた中で、我々も考えなきゃならないなと思いましたのは、まず数値目標として広がりとしての40%というのは政策目標としては当然あるんですが、ボランティアというのは、今までの皆様方のご意見をいただいた中でも活動される場も、活動される方々も、内容も全て多種多様ということで、濃度が違うというんでしょうか。深さが全然違うものがあるので、表面的な面積としての40%というのは目指していかなきゃならないというのはあるんですが、それを現実化するためにはいろいろな取り組みの度合いというんでしょうか。ちょいボラから難民協会さんのほうでもお話がありましたけど、かなり深い深度のものまで含めて、そういったものが全体として広がって行って、最低年に1回活動された方が40%ということ達成するということなので、そういったことを複合的に考えていかなければなりませんので、調査もどれぐらいのボランティアがどれぐらいの濃度で、それぞれいかなる場所で行われたかというのをさらに調べて、そういったことを取り組みのほうにフィードバックするということが非常に重要だということがまず1点ございました。

あと、いろいろなところに知恵がありますので、そういったものをどういうふうに整理して、いかなる形で伝えるかということの、その点がどうしても役所の場合、これまた体験もある種同一の体験がたくさんあって、それを分野だけ整理すれば発信できるというふうに思いがちなんですが、それぞれの体験も背景も、場所も全て異なるということがございますので、そういったものをそれぞれの多様性に着目いたしまして、少し柔軟な形で発信できるということを考えていかなければならないと。そのために発信のプロの話もございましたけれども、例えば広告代理店に委託して、それをやるというやり方ももしかするとあるかもしれませんが、ボランティアのそういった発信には、そういったものは必ずしもなじまないかもしれませんので、いろいろな人の知恵を集めたり、いろいろな方々が持っているらっしゃる媒体みたいなものをどういうふうに結集していくかということ、そういったことを今後ご意見をいただきながら考えていく必要があるかなというふうに思っております。

ボランティアの推進施策は東京都としてもオリンピックが決まってから動き出したというようなこともございまして、ある種行政の施策としても決まりごとがございませぬので、そういったものについてはゼロベースで、一から東京都がつくっていくんだというような形で進めていければなと思っておりますので、ぜひ今後ともよろしくお願ひしたいと思ひ

ます。ありがとうございます。

【山崎分科会長】 大変力強いお話をいただきました。ありがとうございます。いろいろな人の知恵がいろいろな媒体がそこにいろいろな形で参加することによって多様性も出てくる。広がりも出てくる。深さも出てくる。今日は特に深さのお話が皆様から出てきたことに対して、今、次長よりコメントをいただきました。どうでしょう。皆様、何か感想がありますか。

それでは、大変ありがとうございました。今いろいろなご意見を頂戴しました。これを来月の第2回東京都ボランティア活動推進協議会において報告するということになると思いますが、そのことにつきましては事前にご連絡してくださるということですか。そして、その取り組みとして今の具体的に実施できるように事務局が内容を整理してくださいますけれども、今日、十分に議論できなかったところがまだございますので、次回また改めて議論を続けるということによろしいのでしょうか。今日は完成形ではないということで。ありがとうございました。

私の司会がまずくて、時間がどんどんいってしまうんですけども、ほんとうに済みませんでした。今日は皆様から多様な意見をいただきましたことを感謝申し上げたいと思います。

事務局からこれからのスケジュールのご説明はいただけますか。

【猪俣地域活動推進課長】 本日はまことに貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございます。

スケジュール等についてご説明させていただきます。今、山崎分科会長からご説明がりましたが、来月22日に大手町にございます日経ビル6階の日経カンファレンスルームで開催される第2回東京ボランティア活動推進協議会におきまして、本分科会の取り組みについて報告させていただきます。この開催案内につきましては早ければ先週末なのですが、今週前半にはお手元に届くと思いますので、詳細をご確認いただければと思うのですが、この中でこの取り組みについてまとめさせていただいて、報告させていただきたいと思っております。

この協議会におきましては、先日、第1回の際に皆様方に推薦のご協力をお願いし、また、推薦していただいた団体さんにつきましてはご協力いただき、まことにありがとうございます。こちらの推薦により表彰団体を決めまして、東京都共助社会づくりを進めるための社会貢献大賞という大賞、都知事賞なんですけれども、今年度から初めてこういう

表彰制度を創設いたしまして、その贈呈式も1月22日に同時に開催させていただき予定としております。

なお、本分科会の次回以降の開催につきましては、事務局で整理の上、改めて皆様にお知らせいたしますが、本日、ご意見をいただいたものを、山崎分科会長と調整させていただきまして、事前にこういう形で報告しますというものをお知らせの上、1月22日に紹介させていただきたいと思っております。

なお、東京都ボランティア活動推進協議会では、分科会の代表の方にお話をさせていただきたいと思っておりますので、またご協力を依頼させていただきたくもありません。どうぞよろしくお願いいたします。

スケジュール等につきましては以上でございます。

【山崎分科会長】 次回は、来月22日に日経ビルの6階の日経カンファレンスルームで行われますので、そこにご出席をいただくということですね。

【猪俣地域活動推進課長】 そうですね。日曜日ですが、できましたらご参加いただきたいと思っております。オリ・パラ準備局さんのシンポジウムを我々の協議会の後に開くので、そこもあわせて構成団体の皆様にはご通知申し上げて、出欠の確認をさせていただいているという状況です。皆様方に改めてご案内させていただきたいと思っておりますので、もしご出席いただけるようでしたら、どうぞよろしくお願いいたします。

【山崎分科会長】 その後、表彰式なんですね。

【猪俣地域活動推進課長】 そうですね。1部と2部に分かれておまして、1部でこういった気運醸成の取り組みなどについてお話しをさせていただいて、そのあとオリ・パラ事務局で戦略を公表したものを説明したりですとか、第2部のほうは贈呈式を小池都知事から表彰された団体の皆様方に贈呈させていただくという形で、1部、2部合わせて、大体1時間程度、予定しております。

【山崎分科会長】 わかりました。ということでございますので、知事もご出席ということなんですね。次回以降の開催につきましては、今のおりで、どうぞよろしくお願いいたします。申し上げます。

長時間、ほんとうにありがとうございました。本日の検討会の議事はこれで終わったということなのですが、まだ、続きますが、皆様のご協力をいただきまして、ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。どうぞ引き続きご協力お願い申し上げます。ありがとうございました。

— 了 —